

ヨーロッパ紋章についての話 (01・4・14)

——シンボルの背後にあるもの——

万 永 昇 (昭18・理甲)

只今紹介頂いた万永でございます。

本日はお忙しい中、ご来場頂きありがとうございます。今回のテーマは『ヨーロッパ紋章についての話』ですが、この話を通じて世界をこの様な角度から見るといふ見方があり、また『シンボルが背後に背負う歴史の重み』というものを受け取って頂ければ幸いです。

さて、歴史の専門家でもない理科系の私が、このような分野に首を突っ込むことになった経緯を始めにお話ししておきたいと思っています。

今から三十数年前のことになります。当時、仕事柄比較的外国人に接することが多かったのですが、適々その時はスペインの技術者と会っておりました。会社では、外国人の来客がある時は、メインポールにその国の国旗を掲げる習慣で、その時は当然スペインの国

旗を掲げていたのですが、私の記憶の中に何処でどの様にしてインプットされていたのか覚えはなかったのですが、スペインには二種類の国旗がある、という記憶があったのであります。『王室紋章付き国旗』と『紋章なしの国旗』です。そこで、その日挙げられていたのが『王室紋章付き国旗』であり、何気なく「国旗はあれでよかったのか」と問い掛けると、「ノーコメント」と云ったまま暫く話をしなくなってしまったのです。「何かタブーに触れたのかな」と思い、別れた後スペインの歴史を調べてみたら、どうもその原因は『スペインの内戦（一九三六―三七）』に在ると思ひ当たったのであります。

内戦の時、最後に勝利したのは、ナチス・ドイツとムッソリーニ・イタリアの支援を受けたフランコ側で、破れたのは世界列強が内政不干渉を宣言して孤立無援となつた政府共和派側であつたのですが、『王室紋章付き国旗』はフランコ政権のスペイン国旗であり、今は王制ですが当時は未だフランコ政権健在の時期でした（フランコ死後王制になつた）。『紋章なしの国旗』は、政府共和派が最後の牙城としたバルセロナ近辺、即ちカタロニア地方を中心に使用されており、反フランコの意思表示を表した国旗であつた訳です。ご存じの如く『内戦』というものは、どこの国であっても国際法の通用しない残酷そのものになる傾向があり、スペインの内戦でも、一家が両陣営に分かれて戦い、攻防につれて互いに銃殺し合うという悲惨さが繰り返された一面もあつたようであります。

そのスペインの技術者の年齢から推定すると、あの内戦の頃は十才位の頃であったと思われる、その年頃なら内戦の記憶が生々しく残っており、且つ政治問題に触れたくなく「ノ・コメント」という答えになったと理解したのであります。

以来、外国人と会う前にはその国の歴史に予め目を通しておく習慣になったのですが、次第に歴史を読む国が増えてゆく内に、特にヨーロッパの国々・都市の紋章・エンブレムには歴史を主張するシンボルが色濃く残されていることに気付き、『紋章・エンブレムとは何ぞや』という課題を抱えることになったのであります。

然し、多忙な仕事の中でそれに係わっている暇もないので、それに関連する資料と思われるものの情報が見つかった時は、分類ファイルを数十冊作って放り込み、暇になったら整理してみようということにした結果、可なり膨大な資料が溜まってしまいました。

漸くここ数年、仕事から引退して暇が出来たので、命あるうちに整理して置かねばと整理に取り掛かっているのですが、「本日の話」は取り敢えず整理途中の一部を切り出して纏めてみたものでありますことをご了解下さい。

余談ですが、我が三高の『桜章旗』を振り寮歌を高唱する時、集いに満ちる共感はどこからくるのか、それは『桜章旗』が象徴する三高の歴史を共有する共感であると思います。前置きはこの位にして、本論に入ります。

一、「紋章」の紋章学上の定義

まず、国家紋章・都市紋章は紋章学的定義によれば、正しくはエンブレムと云うべきでしょうが、ここでは便宜上広義の「紋章」としてお話しし、国章・州章・市章などともしていることを始めにお断りしておきたい。

紋章の定義は、「楯にそれぞれ個人、乃至は家系を識別できるシンボルを描いた世襲制度のシンボル様式」ということになり、十一世紀、十字軍以降盛んになったのですが、その理由は、十字軍は多数の君主・領主・貴族の混成軍で編成されたため、彼我の識別、命令系統が混乱しないような手段の必要性からであり、普及のもう一つの原動力は、兜で顔・頭を覆った騎乗槍試合（一図参照）での試合者識別の必要性からであります。

紋章によって個人を識別できるということは、同一国内、同一勢力圏内に同一紋章があつてはならないので、紋章登録制度が発達し、同一図柄でも部分的に色を変えたり、区別符号を加えたりのパラエティがうまれることになる訳です。その後紋章は個人のものから国家・都市・教会・大学・ギルド・聖職者・騎士団長・市長等々に拡大してゆき、世襲制の「紋章」と「エンブレム」との区別が曖昧になってきております。

(1図)は、この騎乗槍試合の図で、西ドイツで発行された最後のランツフト公の結婚五〇〇年記念切手ですが、紋章付き楯や紋章を表した馬覆いがなければ誰なのか判らない。この図では右の騎士は当時のバイエルン・オルテンブルグ伯と直ぐ判ったのですが、左側の騎士が青一色で紋章ではないので誰か判らない。そこでニュールンベルグの郵便博物館へ問い合わせを出したら、その手紙がボンの通信郵政省へ、そこから更にバイエルン州立図書館を紹介され、そこへ質問し、その回答から、これは一五一四年に実際にランツフトで行われた騎乗槍試合の手書本から採った図で、この騎士は当時のミュンヘン・バイエルン公ウィルヘルム四世であると漸く判ったのですが、これならば(10図)の中心にある青と白のバイエルン公のラウテン紋章でなければならぬのに、何故青一色なのかの回答が得られなかったので、私なりにバイエルン史を調べた結果の推測を申し上げます。

一五一四年当時のバイエルン公国は、一五〇四―五年のバイエルン継承戦争の後、アルベルト四世によって一旦は統一されたが、一五〇八年公の没後、相続によって兄のウィルヘルム四世のミュンヘン・バイエルン公国と弟ルードヴィヒのランツフト・バイエルン公国とに分かれていた。ランツフトで行われた騎乗槍試合に臨むウィルヘルム四世は隣の弟の領地へ乗り込むことになる。その時バイエルン公国のラウテン紋章を付けたなら、これは統一バイエルンの紋章であるので、分割時代には使用をはばかれたのではないか。

では何故青一色かについては、ドイツ習慣でランデス・ファルベン（領土の色）というのがあり、バイエルンの色は「青」、これなら兄弟共に「青」の領土色なので青一色なら遠慮なく使用できる、ということとで紋章からは外れた「青一色の馬覆い」になったと。

二、紋章の構成

本来、「紋章」は「楯紋章」だけを指すのですが、時代とともに少しづつアクセサリーが加えられ、装飾的に華やかなものになっていった。英語では楯だけのものを Coat of arms、アクセサリーのついたものは Achievement と云い（2 図）、通称として前者を small arms、後者を great arms、ドイツ語では三段階の紋章が存在し、großes Wappen（大紋章）、mittleres Wappen（中紋章）、kleines Wappen（小紋章）となっています。

三、『紋章』についての約束ごと（重要ポイントのみ抜粋）

この項目は専門的になり過ぎるので、適当に重要ポイントだけの抜粋で済ませます。

(1) 合成紋章

- ① 妻独自の紋章は認められていないので、妻の紋章は夫の紋章に妻の生家の紋章を組み合わせた紋章とする。妻に兄弟がなく相続権を持つ妻は、死亡後も夫の紋章の

中に妻の生家の紋章は保存、相続継承される。

② 紋章の中に付加される紋章としては、加増紋章、司教・騎士団長・市長等の職位の紋章などがある。

③ 国王あるいは公国の領主などが自己の紋章を、あるいは主権者がその支配する領地の紋章を加える。

(2) モノカラーの場合の色表示

これはコイン等に刻印された紋章を見る場合には知っておくと便利です。



白・銀



黄・金



赤



青



緑



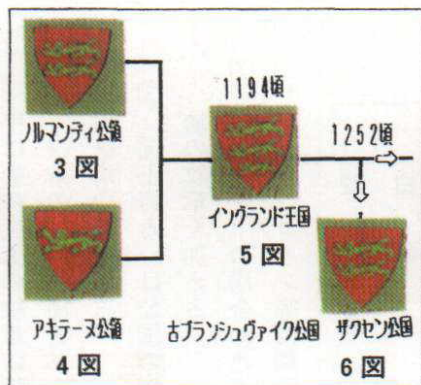
紫



黒

四、『イングランドの紋章はレオパードか』および『三頭のライオン』の由来

紋章に用いるライオンはその姿勢によって、ライオン・ランパント（後足で立上がっている）、ライオン・パッサント（四つ足で歩いている）、ライオン・パッサント・ガードント（歩いており顔をこちらへ向けている）などに区分されており、特にライオン・パッサント・ガードントは『レオパード（豹）』とされ、イングランドのものはこれでありま



英国 大紋章
2 図



現バーデン・ヴュルテンベルク州 州章
8 図



シュタウフェン 王朝の紋章
(1220~)

7 図



ドイツ 1975 発行
1 図



現 バイエルン州 州章
10 図



オーストリア・ケルンテン州 州章
9 図



神聖ローマ帝国
フリードリヒ二世 1215~
16図



オーストリア 国章
1934年 復活した双頭の鷹
17図



イヴァン三世時代 ロマノフ朝の時代
現ロシア共和国の双頭の鷹

12図 ロシア 1997年発行 S/S



パレオログス朝の双頭の鷹
11図



アルバニア 1971発行
15図



現アルバニア 国章
14図



スカンデルバウの家紋
13図



フィンランド国章 1856~1875
(屈辱の国章)

19図



「怒れるライオン」
表情の拡大図

18図



フィンランドの国章
「怒れるライオン」

ロシアの剣を足で踏みつけている



フィンランド国章 1891~1892
(ロシア帝国の国章・双頭の鷹を強制された)

20図

が、通称『ライオン』でも通っています。

三頭の由来は、(3) (5) に示してありますが、リチャード一世獅子心王の時に、従来の六頭のライオン・ランパントの紋章を三頭のパッサント・ガーダントに改訂したのですが、これは父のヘンリー二世プラントジューネ(一一五四―八九)が王位に就く前、一一四九年に母マチルダ(ノルマンディー公領の女相続者)からノルマンディー公領(紋章・ライオン・パッサント・ガーダント二頭)の譲渡を受け、その二年後にアキテーヌ公国の女相続者エリーナと結婚、アキテーヌ公領も手に入れたので、それらの相続人であるリチャード一世が、アキテーヌの一頭とノルマンディーの二頭とを併せて三頭のライオン・パッサント・ガーダントのイングランド紋章を一一九四年頃創出したと云われています。

(2) は現英国大紋章で、楯紋章の四区画のうち、このイングランドの紋章は、第一区画(向かって左上)と第四区画(右下の区画)に見られます。第二区画のライオン・ランパントはスコットランドの紋章、第三区画はアイルランドの竖琴(ハープ)紋章です。

更に(6) は、リチャード一世の妹マチルダがザクセン公(ヴェルフエン家)のハインリヒ一世獅子王に嫁いた時、ライオン二頭の生家の紋章を持ち込み、その息子がアルト・ブランシュヴァイク公国を継承した時、正式に二頭のライオン紋章にした訳です。

五、「ホーエンシュタウフェン王朝の紋章・三頭のライオン」の行方

初期ドイツ王朝であつたシュタウフェン王朝の紋章（）は、金地に黒の三頭のライオン・パッサントですが、一二六八年最後の国王コンラート四世の時、帝国瓦解、大空位時代に入のですが、その子コンラディンがシチリアでフランスのアンジュー家と争い、敗北、処刑されて断絶し消滅した、丁度その頃、「中世の梟勇」といわれたボヘミアの国王タカル二世が一二六九年にオーストリアのケルンテン公領を征服（正しくは篡奪か）した。シュタウフェンが正にその時滅亡した今、オタカル二世の母はシュタウフェン家から来ており（シュタウフェン王朝の神聖ローマ皇帝・シュワーベン公フィリップの娘クニグンデ）、獲得したケルンテン州の紋章にシュタウフェン家の紋章を残しておきたかつたのではと思われる。この紋章は今もオーストリア・ケルンテン州の州章として引き継がれており、それが（）にあります。向かつて左半分がそれで、右の半分は、初代オーストリア大公であり既に断絶しているバーベンベルグ家の紋章で、その後この右の紋章は、統一オーストリアを象徴する「ビンデン・シールド」としてオーストリアの到る所で使用されています。（）の一九三四年一時期復活した「双頭の鷲」の胸にもその紋章が見えます。一方、シュタウフェン断絶後、公領の大部分を所領としたヴェルテンベルグ王国で

は紋章などに用いられ、現在のバーデン・ヴュルテンベルク州章（8図）に引き継がれています。ハイデルベルグ城を訪れた時、城の塔の上にこの州旗が翻っていました。また、シュタウフェンのシュワーベン公領は、現バイエルン州にも跨がっていたので、現バイエルン州章（10図）第四区画にシュタウフェンの三頭のライオン紋章が入っています。

六、『双頭の鷲』の国章

『双頭の鷲』のシンボルは、権威の象徴として、そのルーツは遠くメソポタミアに発しているのですが、『紋章としての双頭の鷲』には二つの系統があり、一つは『ビザンツの双頭の鷲』（11図）、もう一つは『神聖ローマ帝国の双頭の鷲』（16図）であります。この二つの『双頭の鷲』は夫々違った意味を持っています。

『ビザンツの双頭の鷲』は、ローマとコンスタンチノーブルに分裂したローマ帝国とビザンツ帝国の再びの合体の願望をシンボル化したものと云われ、「ローマの単頭の鷲」と『ビザンツの単頭の鷲』とを合体させた『双頭の鷲』、一方『神聖ローマ帝国の双頭の鷲』は、カール大帝がヨーロッパを統一し、ローマ教皇から戴冠を受けた後、その没後、相続によってロタール帝国、東ローマ帝国、西ローマ帝国に三分割されたが、最終的に西ロー

マ帝国に吸収され、神聖ローマ帝国が誕生、皇帝フリードリヒ二世の時（一二一五年）ローマ帝国と神聖ローマ帝国との合体願望の象徴として創出されたと云われ、向かって右向きは「ドイツ単頭の鷲」向かって左向きは「ローマの単頭の鷲」とされ、向かって左側が楯紋章の上位とされていますから、戴冠を授けるローマに敬意を表しているのでしょうか。さてその後の夫々の『双頭の鷲』はどのようなになっていったかをお話しします。

前者『ビザンツの双頭の鷲』は、ビザンツ帝国滅亡後、ビザンツ最後の皇帝の姪と結婚していたモスクワ公国のイヴァン三世がロシア正教をバックに一五〇二年ビザンツの継承を自称しツァーリ（皇帝）を名乗って、「赤地に金の双頭の鷲」を国章とした。その後ロマノフ王朝となり、一六九九年ピョートル大帝が国章を「金地に黒の双頭の鷲」とした。

革命後のソ連時代には紋章が廃止されたが、一九九〇年ロシア共和国となって『赤地に金色の双頭の鷲』を復活させた、この変遷が（12図）の記念切手小型シートに並べられています。テレビ・ニュースで注意して見ると時々ロシア国会の演壇の後ろにあるこの紋章が見られることがあります。

また、ビザンツ衰亡の途中、セルビア国王ドシヤンがビザンツの継承を目論んで軍隊を率いてビザンツを目指したが途中陣没、撤退したが、パレオロゴス家（親戚にあった）の

紋章を国章に採り入れ、後セルビア王国の国章にパレオロゴスの紋章を胸に抱いた『双頭の鷲』が登場し、現在のセルビア共和国の国章になっております。【この話の後で判った事、旧ボスニア・ヘルツェゴヴィナに一九九五年成立したスルブスカ共和国の国章に『双頭の鷲』が使用されていました】また、ビザンツを滅ぼしたトルコ帝国のバルカン半島征服に対し最後まで抗戦したアルバニア侯国のスカンデルベグ侯によって「双頭の鷲」が親ビザンツの彼の家紋に採り入れられ（13図）、この国民的英雄スカンデルベグに由来する『双頭の鷲』は現在のアルバニア共和国の国章に継承されています（14・15図）。

後者『神聖ローマ帝国の双頭の鷲』は、一八〇六年にナポレオンの圧力で崩壊解体した神聖ローマ帝国の皇帝フランツ一世がハプスブルグ出身で、オーストリアへ戻り、オーストリア帝国を創設しまして、国章を『双頭の鷲』としました。ところが一九一八年第一次大戦後、オーストリアは共和国となり、国章を「単頭の鷲」に変更してしまつた。そのまゝ「単頭の鷲」が続いていたのですが、第二次大戦の直前にナチの脅威に対抗するために挙国一致で立ち上がらねばという気運があり、当時の首相ドルフスが国民の士気を鼓舞するため『オーストリアの双頭の鷲』を復活させ（17図）この双頭の鷲の胸にある紋章は先程申し上げたバーベンベルグに由来する「オーストリアのビンデン・シールド」と云われているものであります。ところがナチの青年党が暗躍し、ドルフスが暗殺され、その直後

にナチ青年党に呼応したようにナチス・ドイツがオーストリアを無血占領してオーストリアはドイツに吸収されてしまった。戦後復活したオーストリア共和国の国章は「単頭の鷲」に戻ってしまったのであります。このように『神聖ローマ帝国の双頭の鷲』はここで消滅してしまったのであります。然し神聖ローマ帝国時代の帝国都市、帝国自由都市の中に多数の『帝国の双頭の鷲』が使用認可され、今も残されている都市が多くあります。

七、国家間の争いに影響された紋章、紋章をめぐる国家間の争い

ここでは、フィンランドとロシア帝国、ギリシア共和国とマケドニア共和国の二つの例について解説したいと思います。シンボルの重みが判る例と思います。

第一例のフィンランドの国章が(18図)にあります。これは『怒れるライオン』として世界でも有名ですが、現在の紋章の一部を拡大してあるこの怒りの表情を見て下さい。この国章になったのは十六世紀です。フィンランドの歴史をみますとロシアと四十数回戦争をやっています。自分から仕掛けた戦争ではなく、ロシアから仕掛けた戦争です。何故ロシアから仕掛けたかは、バルト海の制海権を握るためにバルト沿岸のフィンランドの領土が欲しくて何度も何度も戦争を仕掛けた訳です。一五七〇年この時のロシアの皇帝イヴ

アン四世雷帝が大軍を率いて攻め込み、フィンランドの壮丁を大量に捕虜にし、略奪をほしいままにした。この戦争は二十五年続いてその丁度真中頃にこの「怒れるライオン」の紋章を創ってロシアに対する怒りを国民に呼びかけた。これが今も継承されている訳です。この国章のライオンが足の下に踏まえているのはロシアの剣であります。この国章が現在でも国章であります。現在に到るまで延々と紋章の争いがあったのであります。

十八世紀始めにまたロシアとの間に有名な「北方戦争」があり、この途中でスウェーデンのアドルフ十二世が頭を銃弾で撃ち抜かれて戦死し、銃弾が貫き抜けた穴のあいた頭蓋骨が残されています。この時代はフィンランド史でも「大いなる怒りの時代」と云われています。その戦争の結果、ロシアはリボニア、エストニア、イングリア、カレリアなどを奪い取った訳です。特にカレリアはフィンランドにとってとても重要な地域で、この結果スウェーデンのバルト帝国が崩壊したと云えるでしょう。

その後、ナポレオン時代にナポレオンとロマノフ王朝との間に密約が結ばれ、ナポレオンはバルト三国を獲る、ロシアはフィンランド切り取り自由という密約で、ロシアはフィンランドに雪崩れ込んだ結果、フィンランドは敢えなくロシアに吸収され、ロシア皇帝がフィンランド大公国の大公を兼ねるというロシア領フィンランド大公国となってしまうのであります。

それからフィンランド国内では、延々と反ロシアの抗争が始まるのでありますが、これを歴史で追跡してみますと、先ず一八三五年に「カレワラ」という愛国叙事詩がフィンランド語で出版され、一八四八年にはリューネベルイによる「フィンランド国歌・祖国」が作詞された。この様な国民運動に対してロシアのニコライ一世が国民運動弾圧を強行し、フィンランド語の出版を一切禁止したのです。

やがて、アレクサンドル二世が爆弾で暗殺される事件が起こり、ロシアとフィンランドとの間に危機感が盛り上がった時、フィンランドの首相スレイマンが大活躍をして、ロシアとの間の融和策を進めて多少は緩和したのでありますが、その結果どういうことが起こったかと云うと、国章を変更したのであります。(19図)の切手がそれで、一八五六年の制定の年号があり、七十五周年記念切手で、この国章は一八七五年迄使われました。この国章は、足下に踏まえていたロシアの剣を棒に替えている、その棒の上を歩いている図で、表情も柔和になっており、正に屈辱の国章であります。ここで一寸ミステリーがあつたのですがそれは後程申しあげます。

そうこうしているうちに一八七五年に『怒れるライオン国章』を復活させたのでありますが、忽ち二三年後にアレクサンドル三世が非常に強力な独裁国家体制をとり、秘密警察を創ってフィンランド弾圧を再開したのであります。フィンランドの国章・切手は全て

『ロシアの双頭の鷲』の国章に変えられた(20図)、ロシアに強制された国章であります。更に国民運動が活発になり、この強制された国章を二年後には撤回させ、再び『怒れるライオン』国章の復活をやったのであります。

更にロシアの方は、総督としてポブリコフを任命し、これがまた強烈な弾圧をやったのであります。その時憂国の作曲家シベリウスが現れ「交響曲フィンランディア」を作曲、国民主義を鼓舞した。ポブリコフは更に弾圧を進め、フィンランド語廃止、ロシア語強制、フィンランド人をロシア軍に編入するための徴兵令を発令、憲法の停止をする、とたたみかけて弾圧を強行したのであります。この時の国章はまだ「ロシアの双頭の鷲」を使用させられていた時であります。

丁度その時、日露戦争が勃発しまして、一九〇四年であります、ロシアの艦隊が極東へ向けて出発したその隙間にフィンランドの愛国の一青年がポブリコフ総督を刺殺し、その場で自殺したという強烈な事件が発生しています。その時ロシアとフィンランドの間には正に一触即発の戦争状態になった訳であります。国力の弱いフィンランドの国家危機であったのですが、そこへロシアのバルチック艦隊を日本が壊滅したというので、国中万歳ということになり、大変な日本人気を博し、その時の喜びの現れが(21図)にあげておきましたビル、アドミラル・トーゴのラベルであり、今でも使用されています。

このロシアと日本が戦った裏側で、フィンランドの国家危機に当って一つのエピソードがありました。日本の諜報活動の中に明石大佐という方がおられ、私の大学の同級生が国会図書館で調べてくれたのですが、明石大佐はモスクワの大使館付き駐在武官であったのですが、諜報活動で日露戦争が始まることを予測し、明石大佐はスウェーデンにゆき、そこでロシアが極東へ目を向けている間にロシアを背後から襲う計画を立て、その舞台がフィンランドであった。そのフィンランドの独立秘密党員の首領と連絡を取り合いながら、日本の参謀本部から当時一〇〇万でしたかの軍資金を貰い、武器を調達し、その武器をフィンランドに陸揚げし、それをフィンランドの独立秘密党員にもたせて、ロシアの背後を衝こうという計画、ところが武器陸揚げの丁度その時に暴風雨に襲われて船が沈没してこの計画は水泡に帰した、という「明石リポート」があるそうです。

そのようにフィンランドと日本は日露戦争を挟んで、その表裏で関係が深かったのです。がフィンランドとロシアの間には激しい争いがあったことが、国のシンボルである国章の変遷の形でその足跡が残されている、ということなのであります。

さて、先程一寸申し上げたミステリーについてですが、それは一八五六年の屈辱的国章(19図)です。一九九九年ヘルシンキのThe National Board of Antiquitiesから発行された「THE LION OF FINLAND」という書を手でできたので、早速調べてみたのです

が、その「ライオン紋章史」の中に一八五六年の記録がなく、代わりに一八五七年のロシアの法令で決められた国章は、足下には剣も棒もなく、後足で立ったライオンの右手にフィンランドの剣を翳し、右手にロシアの剣をぶら下げている図柄であります。その図は記載されていますが、解説にはこの国章をフィンランドは無視した、とあります。

とすれば、あの『国辱的国章』は何なのか、というミステリーであります。フィンランドの公式切手に描かれているので、公式に国家が認めている国章であるのに、であります。恐らく、フィンランドがロシアに国辱的弾圧を加えられている現状を『国辱的国章』の形のシンボルに表し、国民に更に世界に訴えたかったのであろう、と推察されます。

もう一つの例は、ギリシアとマケドニア共和国。今のマケドニア共和国はコソボ地区とアルバニア、ギリシアと多角関係にある訳で、マケドニアの直ぐ南がギリシアであります。事の起こりは一九七七年に、今から二十四、五年前、ギリシアのテッサロニキという有名な港があり、その西側にベルギナというところがありまして、ここは昔のマケドニア王国の首都と云われていたのですが、ここで発掘があり、フィリポス二世というアレクサンドル大王の父親であります、その墓が見つかり、発掘してみると黄金の納骨箱が出ましてフィリポス二世のものであることが確認されたという大発見があります。これ

が(22図)にあり、この箱のレプリカですが東京で私は見せてもらいました。この箱の表に所謂『ベルギナの星』というフィリップス二世のエンブレムが彫刻してあるのですが、それから十数年後に例のユーゴスラビアの解体がありまして、クロアチア、スロヴェニアが独立し、その過程の中にマケドニアも独立した経緯があります。残ったセルビア共和国とモンテネグロ共和国で新ユーゴ共和国を創り、今はミロシェヴィッチ大統領が暴れまくっている訳ですが、マケドニア共和国が独立した時に国旗を創った(23図)これが物議をかもした発端であります。『ベルギナの星』を国旗に使用したのであります。先ずギリシアが、昔のマケドニア王国はアレクサンドル大王のお父さんの頃の王国が今のギリシアとマケドニア共和国に分断されて国境を挟んで跨がっている形になっており、ギリシアにもマケドニア地方という地方があり、国境の向こうにマケドニア共和国がある。しかも昔のマケドニア王国はギリシア側が根拠地であり、従って『ベルギナの星』はギリシアの権利である。それをマケドニア共和国が国旗として盗んだのはけしからんということで、ギリシアがどういう手を打ったかといいますと、その他にマケドニアの憲法第一条をめぐっての争いがあり、これは昔のマケドニア王国の領土を復活させるというニュアンスが折り込まれており、これもけしからん、直せという訳で、色々交渉があり、遂にギリシアはテッサロニキの港を封鎖するという手段をとった。マケドニア共和国には海岸がなく港がないの

で、テッサロニキ港の封鎖は經濟封鎖に等しいことになります。

適々その時マケドニアが国連に加盟したいと国連本部に申請していたのをギリシアが追っかけて待ったをかけた。まず国名を変更せよ、憲法第一条を改定せよ、国旗の中の『ベルギナの星』を消せ、という国連を舞台の争いに発展した。ところが一九九五年突然妥協してしまった。旗からは『ベルギナの星』は外す、国の名はちよつと待ってくれ、憲法第一条はペンディング、但し後の二件は問題として残っているという確認書を交換して急遽妥結してしまつたのです。その背後に何があつたかといふと、セルビアがボスニアになだれ込み、ボスニアの次はマケドニアにくる、更にその南隣にギリシアがあり、この危機感のために大急ぎで、この様な争いをつづけている訳にはいけない、早く国防に専念することが先決という判断からであります。

これがギリシア・マケドニア両共和国間の「国章をめぐる争い」のいきさつであります。これ程歴史を背負つたシンボルには重みがあり、国民感情がからまつてくる例としてご理解いただければと思います。

八、各国主要都市の紋章

各国主要都市の中から比較的日本人に親しまれ、皆さんの中にも既に行かれた又は今後行

かれるかも知れない二十の都市を選んで夫々の歴史的意味の解説を試みることにします。

24 図、アムステルダム市の紋章は、真ん中に×××と三つ、これは『聖アンドレアスの十字』で、聖アンドレアスが処刑された時、磔にされた×十字を表し、その教会が十四世紀一三〇六年に建てられてアムステルダムに在り、このシンボルが都市紋章に採り入れられている訳です。

この聖アンドレアスは、現在スコットランドとロシアの守護聖人でもあり、現在スコットランドの国旗にこの十字が使われており、ユニオンジャックは、アイルランドの守護聖人「聖パトリックの十字」、もう一つはイングランドの「聖ジョージの十字」、聖ジョージはロンドンの守護聖人であり、英国王室の守護聖人でもある。そういう三つの十字が組み合わされたのが現英国の国旗ユニオンジャックであります。

25 図、ベルリン市の紋章は「熊」の図柄であります。ベルリンというのはドイツ語の熊であり、ベルリンの都市を創ったのはブランデンブルグのアルブレヒト熊伯であった。十二世紀のその時、都市の名を、熊伯が創ったのだから都市紋章は熊にしようとしたのだが、熊の街は Bär Stadt、だが Bär は男性名詞、Stadt は女性名詞で相性が悪く、牝熊 Bärin

Stadtを採扱、これがベルリンの名の起りというお話であります。

熊は始めから立ち上がった熊ではなく、最初の頃十四世紀のものは(44図)のように歩いている熊でした。これが十八世紀にプロシア王国の首都になった時、現在の立ち上がった熊の紋章に変えたということになっています。

26図はスイスのベルン市、一一九一年ツエーリンゲン家のベルヒトルド五世によって建設され、当時大森林であったここで公の狩りの最初の名を街の名にしようとしていたところ獲物は熊であった。この紋章は十三世紀には単に熊が歩いている図柄であったのだが、スイスの歴史を辿ると、ハプスブルグ家との戦いが延々と続いていますね、その中から「ウイリアムテルのリングの伝説」が生まれてきたといわれていますが、シュロスハルデンの戦いというのが一二七三年にあった時、スイスの軍が非常な痛手を受け、スイス・ベルンの旗手が血染めになって倒れ、ベルンの旗が血で染まった、この事を忘れるなどという意味で血の色の赤の中に金色の帯を入れ、その中に熊を歩かせた図柄にしたという伝承があります。

27図、ドイツの旧首都ボン市、これは(6図)で申し上げたブランシュヴァイクの二頭

のライオンの紋章に続く話であります。ブランシュヴァイクに居たザクセン公のハインリヒ一世獅子王の子供の代で男系が絶えたため、彼の孫娘マチルデは夙にイングランドのリチャード一世に嫁いでいたのですが、妹のアグネスが結婚した先がバイエルン・ウィッテルスバッハ家のオットー二世で、その時ライオン紋章を生家の紋章として貰ってゆき、バイエルンにライオン紋章を持ち込んだ。オットー二世は初めは二頭のライオン紋章を使用した形跡があるが、直ぐに紋章を殺定し、「プファルツのライオン」を用いた。オットー二世はプファルツの伯を兼務していたので、その紋章としての「黒地に金色のライオン・ランパント」の図柄を採用した、これがニーダー・バイエルンの紋章として引き継がれ、(10図)にある現在のバイエルン州章の第二区画に入っているのがそれですが、この紋章は元来プファルツのものであります。ボンはその後十七世紀にケルン司教領に含まれた時にケルンの司教がボンの町に紋章を与えたという経緯があります。その紋章が現在の市の紋章の上の区画に入っている「黒の十字」がケルン司教の紋章であります。下にあるのが現在は赤地のライオンですが、当時に貰った紋章は、十九世紀末まで使われていたのですが、それは青地に銀色のライオンが歩いている図で、その後変更され、赤地に一頭のライオンになっている。これは逆上つてみると最初にブランシュヴァイクから持ち込んだ二頭のライオンの半分の一頭のライオンで色も今の色に変えたと思われる。

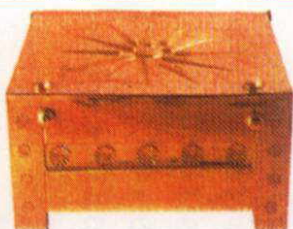
28 図は、ベルギーのブラッセル市、大天使ミカエルはブラッセルの守護聖人で、ミカエルの大聖堂があり、その足元で突き刺されているのは悪魔で、黒い頭を持ち仰向けになっている。龍退治の方は聖ジョージがありますが、ミカエルの方は悪魔退治で、これは「ヨハネ黙示録」に出てくる話であります。

29 図は、フランクフルト・アム・マイン市であります。これは特にどうということはないのですが、フランクフルトはローマ時代からローマ軍の駐屯地であったのですが、一二四五年に帝国都市に指定され、更に帝国自由都市になったので、帝国都市として『帝国の鷲』を市章としていますが、『帝国の鷲』とは色を変えて『赤地に銀色の鷲』としています。ご存じのゲーテの博物館があります。

30 図は、スイスのジュネーヴ市、ドイツ語ではゲンフ、向かって左側がハプスブルグの鷲の半分、右側がジュネーヴの司教のシンボル、教会のシンボルである鍵を示しています。先程申し上げたボヘミアのオタカル二世とハプスブルグのルドルフがマルヒフェルドの大決戦でオタカルを打ち潰して、ハプスブルグが神聖ローマ帝国の皇帝の地歩を固め、ボヘミア王国の遺領を引き継ぎ、ここでハプスブルグの大きな勢力の基礎ができ、スイスからと

び出したいきさつがあり、ハプスブルグはいまだにスイスに紋章を残しています。

31 図、イエルサレム市、今問題のイエルサレムです。キリスト教の聖地であるか、イスラム教の聖地であるか。イスラエル共和国とパレスチナ問題であります。この市章のライオンは『ユダのライオン』といわれるものです。ライオンには色々な伝説がありますが、これは『ユダのライオン』伝説。その後ろの周りに石積み模様がありますが、これは『嘆きの壁』、その周りがある章は『オリーブ』であります。オリーブは国王とか聖職者が位に就く時、オリーブの油で身を清める儀式があり、そのオリーブをあしらっている。さて『ユダのライオン』とは何であるかということですが、抑は旧約聖書の中にありまして、『予言の書』の中にヤコブが十二人の孫を集めて、この十二人の孫はイスラエルの十二支族を表し、夫々王国を持つているのですが、その中にユダ王国もあり、ヤコブはお前はこういう性格だから将来こうなるだろう、だから注意しろ、と夫々に将来を予言し注意を与えたのだが、ユダだけは褒められ「お前は若獅子である。やがてイスラエルの王国を統一するであろう。国民は皆お前に従うであろう」と予言した。その時の予言「お前は若獅子である」という予言が『ユダのライオン伝説』の原点になっており、その後イスラエル王国が滅び、ユダヤ民族の流浪が始まるのですが、ユダヤ民族の「希望の星」として



1977年 Verginaで発見された
古マケドニア王国・フィリポス二世の
黄金の納骨箱：蓋にベルギナの星

22図



1992年 マケドニア共和国発行 国旗切手
「Verginaの星」を使用している

23図



フィンランド・ビールの商標

21図



BERLIN

25図



AMSTERDAM

24図



JERUSALEM

31図



GENEVA

30図



FRANKFURT-AM-MAIN

29図



BRUSSELS

28図



BONN

27図



BERN

26図



PRAGUE

37図



PARIS

36図



MOSCOW

35図



MONACO

34図



LUXEMBOURG

33図



LONDON

32図



ZURICH

43図



WIEN
(VIENNA)

42図



WARSAW

41図



ROME

40図



STOCKHOLM

39図



SANTIAGO
DE CHILE

38図



リトアニアの
“白馬の騎士・追跡者”
紋章
46図



ロンドン・シティの紋章
45図



BERLIN, 14. Jahrh.

44図



1965 発行 Warsaw 100年記念

48図



パリ水運博覧会の印

47図

「いつかユダのライオンが復活するであろう」と云い伝えてきている。「その第一の復活がダビデ王（ソロモン王の父）である」と信じられており、今の「嘆きの壁」はダビデ王の創った神殿の一部であると云われている。その後ダビデの王国も滅び、その次に「ユダのライオンの復活」と思われているのがエチオピアのハイレセラシエ皇帝であります。これはサバの女王、イエメン、オマーンの辺りのサバ族の女王であったのが、乳香を売るためにキャラバン隊を率いて北上し、ソロモン王と会って恋に落ち一年間逗留してしまった。紀元前九七〇年の頃の話であります。一年も国を留居にしたため足元の王国がおかしくなり、急いで帰国した女王はその時ソロモン王の子を妊娠しており、帰国して子供が生まれ、その子の子孫が対岸のエチオピアへ渡り、その子孫がエチオピアを統括してエチオピア帝国を創ったハイレセラシエであり、従ってイスラエルのソロモン王の血をひく「ユダのライオン」であるという伝説、「彼がユダや民族の希望の星」の一人であると云われていた。然し、彼も革命によって倒されたので、今度は誰が「ユダのライオンの復活」になってくれるのかという希望がこめられて延々と伝えられている。この様に流浪し分散する虐げられた民族は、宗教であれ伝説であれ、「民族共通の希望」を持たなければ結束できないという意味で『ユダのライオン伝説』が伝えられているのでしょう。

「嘆きの壁」は古イスラエル王国のダビデ王がこしらえた神殿の跡でこれを聖地とした。

それは紀元前のことですが、その後七世紀頃マホメットが創始したイスラムがこの地の神殿を創った。イスラムの勢力が強くこの地域を長い間占領し十字軍が起こって取り返せとなるのだが、その時イスラムの神殿をユダヤの神殿の隣に創っていたので互いに聖地としていたため、どちらが統括しても自分たちの聖地が冒されたとなるので共同統治にしたらという案もあるがなかなか旨く纏まりそうもない現状であります。

32 図。 ロンドン市です。これは先に申し上げたロンドンが首都になっている英国の守護聖人『聖ジョージの十字』であります。左の上の方にある剣は、ロンドン市の守護聖人である聖ポールが殺された時の剣で、これを忘れるなというシンボルであります。

33 図。 は、ルクセンブルグ市の市章です。このライオンの尻尾をよく見てもらうと『二股尾のライオン』であります。横線の模様が昔のルクセンブルグの紋章であり、その後二股尾のライオンが入ってくるのですが、このあたりの地域は歴史的に別れたりくっついたり非常にややこしい地域ですが、今はルクセンブルグ公国として独立しておりますが、直ぐ隣のベルギーにもルクセンブルグ州があります。先程のマケドニアとギリシアでは紛争になりましたが、ここでは仲良くやっているようです。この両ルクセンブルグの紋章はよ

く似た紋章を使っております。どちらも『リンブルグのライオン』の紋章から出たライオンであります。ベルギーにリンブルグ州が今もありますが、この紋章には後ろの横縞の紋様は当然なく、赤い『二股尾のリンブルグのライオン』であります。これが結婚だとか併合だとか別れたとかで『リンブルグのライオン』がルクセンブルグに入ってきている訳です。この「赤い二股尾のライオン」は『リンブルグのライオン』とご理解いただきたい。ここでややこしいのは、ルクセンブルグ市、ルクセンブルグ大公国、隣のベルギーのルクセンブルグ州のよく似た図柄をどこで区別するかということですが、よく見ると尾が少し違うとか足の高さが少し違うとかの区別点があります。

『二股尾のライオン』は元来リンブルグのものですが、他にチェコ共和国の国章の中に所謂『チェコの二股尾のライオン』があります。これはどうしてかと云いますと、図は紙面の都合でカットしましたが、十字軍の時、チェコ（ボヘミア）の軍団が目覚ましい戦功を上げたので、神聖ローマ皇帝がそれを褒めて紋章を与えたのが『二股尾のライオン』ですが、リンブルグの方が先にあったので、色を逆にして『赤地に白い二股尾のライオン』としたのが『ボヘミアのライオン』または『チェコのライオン』と云われているものです。

34 図はモナコ市。グレースケアーリーが嫁した公国であります。このモナコ市章の中の坊

さんが左手に持っている楯の紋章がモナコ公家・国家の紋章であります。ではこの坊さんは誰かと云うと、モナコの歴史をみますと、隣のイタリアのスピノラ家と猛烈な勢力争いがあり、領地を取ったり取られたりし、今の公室モナコのグリマルディ家が十三世紀の終わりにスピノラ家に城を分捕られたので、それを取り返すためにグリマルディ家のフランチェスコが僧侶に変装して数人の部下と共に城に入り込み、何とかの木馬ではありませんが城の内部から開門して城を取り返したという故事があり、これを記念して紋章に採り入れたもの、従ってこの僧侶はグリマルディ家のフランチェスコの変装姿であります。

35 図、モスクワ市の市章。聖ジョージの像の図柄です。何故聖ジョージなのかを調べて見ますと、十二世紀から十三世紀にかけてモスクワの国が徐々にでき始めた初期の頃、この頃からモスクワ公国へ向けて大きくなってゆくのですが、「双頭の鷲」のところで申し上げた十五世紀になりますとイヴァン三世がビザンツ帝国の後継を名乗る訳ですが、このモスクワ公国の十四世紀にワシーリー一世という公がいて、リトアニアの公女と結婚したのでありますが、このリトアニア大公国の紋章が**(46 図)**にあります。このリトアニアの王女がこの紋章をモスクワに持ち込んだ。ところがその頃ロシアのイコンにもよく見られるのですが「龍退治をした軍神聖ジョージ」が非常な信仰を集めており、この聖ジョージと

『リトアニアの白馬の騎士』とのイメージが重なってモスクワの都市紋章が創られたように思われます。

(46図)のリトアニアの紋章というのは、スラブ神話にあるスヴェントヴィトという軍神であり、この軍神はいろんな神々の中で最高の地位にある軍神で、これが国家危急存亡の時に白馬に乗って現れるという伝説神話があります。リトアニアについては現今では、第二次大戦中、日本の杉山領事がユダヤ人に大量のビザを発行して六〇〇〇人を救ったことで注目を集めました非常に小さな国ですが、その当時のリトアニア大公国は非常に大きな国で北はバルト海から南は黒海に達する大公国であった。このリトアニアがポーランドと同君連合をやって隣国ドイツ騎士団と一四一〇年グルンワルドの大会戦でドイツ騎士団を壊滅的に撃破したのですが、この戦いの時に登場したのが大公ヴィトウタスで、これがこの伝説にあやかり、白馬に乗り白の甲冑を着けて軍の先頭に立って戦ったという故事があります。この白馬の騎士はリトアニア語では「ボゴニユ」といっていますが、英語ではパーシェイダー、つまり「追跡者」の意味で、敵を追いつめる勇者であります。

ついでに申し上げますと、この『白馬の騎士』の紋章は、今のベラルーシ共和国の国章にもなっており、ロシアとポーランドの間に挟まれ、リトアニアの南に位置するベラルーシは昔のリトアニア大公国の領地であったのが、今は独立しており、その国章に『リトア

ニアに由来する白馬の騎士』を採用していますが、リトアニアのものとは部分的に色を少し変えてあります。

36 図はパリ市です。ご覧になれば直ぐ判る様に、上の部分はフランス国の「ユリ紋章」、下はパリのモチーフでもあります船であります。この船の由来が**(47 図)**にあります。パリの水運業者同業組合のエンブレムです。パリは今は文化都市となっていますが、昔は水運業で発達したので、それを忘れないよう水運のシンボルとしてこのエンブレムを市章に採り入れている訳です。

37 図に参りまして、チェコのプラハ市、ドイツ語ではプラークですが、この紋章は都市防衛のシンボルとして都市城門に剣を持った片腕が覗いている図です。これは十五世紀神聖ローマ皇帝フリードリヒ三世がウィーンで反乱市民軍によって幽閉され何週間か閉じ込められたのですが、これを救いにいったのがチェコのポデイエブラディ、ボヘミアの国王であり、旨く救い出して皇帝をプラハに連れて帰った、その事を感謝して皇帝がプラハの町に紋章を与えたのがこれであります。

38 図は南米チリの首都サンチアゴ市。何故ここへ南米のものを持ってきたかと云いますと、この市章にある内容がヨーロッパと非常に密接な関係があります。ご承知のようにチリはスペインが征服し、十九世紀始めに独立したのですが、この時の首都サンチアゴはスペインのサンチアゴ・デ・コンポステラ、スペインの西北の端に在るキリスト教の巡礼の聖地であり、ここに十二使徒の一人ヤコブの遺骨が祀っており、この遺骨は九世紀にこの地で発見されたとされています。そのサンチアゴの名を採ったのですが、本家のサンチアゴは当時レオン王国に在り、レオン王国の国章でありライオンを採り入れています。ちょっと茶色掛かったライオンで、この色のライオンはレオン王国にしかありません。

周りの枠内にある『帆立貝』にはこれまた面白い伝説がありまして、ヤコブが殉教で殺されまして、ヤコブの死骸を弟子達が船にのせ、波に任せてスペインのガリシア、今のバスク地方と云われている所、「ピカソのゲルニカ」もこの近くに在りますが、ここへ流れ着いた、その時に、王国の騎士が海岸にいて、馬に乗っていたのですが馬が驚いて竿立ちになったため騎士が振り落とされて海に落ちたのです、重い甲冑を着けているので沈む筈ですが、この時は浮き上ってきて船に救上げられた。その時に「帆立貝」が鎧一杯にくっ付いており、そのために浮き上がって救けられた、これは「ヤコブの奇跡」であるということで、この「帆立貝」が巡礼のシンボルとなっている訳で、実際に中世の巡礼の人達

は帆立貝を携えスプーンの代わりにしたとか。いうことで本家サンチアゴの「ヤコブの奇跡」に因んで「帆立貝」がここに登場することになった。また「帆立貝」は「サンジャック貝」とも云い、サンチアゴもサンジャックからきている名前であります。そういうことで、サンチアゴ市章はヨーロッパと密接な関連がある例として採り上げた訳です。

39 図は、スウェーデンの首都ストックホルム市。この町は、一一八七年国王クヌート・エリクセンによって建設され、その国王の肖像であります。

40 図は、ローマ市のもので、「S Q P R」はラテン語で、ローマ元老院とローマ市民「Senetas Populus Que Romanus」の頭文字を表し、全ローマ国民の意味で共和国成立以来ローマ人が自分の国家を呼ぶ際この略号を用いてきたいきさつがあります。向かって左の方にある十字は教皇座があるというシンボル。

41 図は、ポーランド首都ワルシャワ市。これは「人魚」で、十五世紀頃求められたように「ワルシャワの人魚伝説」に由来している。伝説自体はたわいのないもので昔々と云うものですが、川の畔に一人の漁師が住んでいて、ある日川の流れの中から美しい声で歌う

「人魚」がいて、これを捕まえて家に連れ帰ったところ、人魚が川へ返してくれ、返してくれたら貴方は金持ちになり栄えるだろう、と言うので可哀相になって川へ返してやったら、忽ち金持ちになり、町が発展して栄えたという伝説。そこで「人魚」が十五世紀から市章に登場、初めの頃の人魚は、(48図)に挙げてありますが、この人魚は鳥の足、魚の尻尾、人間の頭という人魚でしたが、後十七世紀に(41図)にあるような人魚らしい『人魚』に改定された。右手にもつ剣はサルマティアの剣、サルマティアはポーランドの古名。この『人魚』については面白い話があります。第二次大戦中、ワルシャワがドイツに占領された折、レジスタンスが起こり、このレジスタンスがシンボルとしてこの人魚を使ったので街中にこの人魚の落書きが一杯現れて「レジスタンス健在なり」というサインに使われ、街中がこのシンボルの落書きだらけになったという話です。

こういうように、紋章を何かのシンボルとして使われた例が、ユダヤの『ダビデの六芒星』、ナチス軍がここがユダヤ人の家だという印にこの六芒星を書いて廻った。この『ダビデの六芒星』は、現在のイスラエル共和国の国旗の中央に大きく描かれています。

42図、ウィーン市。十一世紀初頭からの紋章で、オーストリアの最初の公であったバーベンベルグ家が十字軍に参加したときに創られ使用されたものがウィーン市の紋章になっ

ており、幾多の変遷があつたが今も使われています。

43 図は、スイスのチューリヒ市。この紋章は非常にシンプルですが、これを調べているうちに驚いたのですが、昔のチューリヒの紋章は凄い紋章であります。三人の僧侶が並んで立っているのですが、皆首がない、一人一人が切り落とされた自分の首を両手に抱えて立っている図で、これは殉教者を表しており、名前も皆判っているのですが、この殉教を忘れるな、そのお蔭で今がある、というシンボルですが、余りにも無残であり、今のシンブルなものに変えられたと思います。

これで一通り今日の話は終わりますが、ここで採り上げたのは僅かの例で、紋章図柄としては他にドラゴン、グリフィン等々も夫々に背後に歴史があります。採りげた例の如くにヨーロッパの紋章・エンブレムには、過去の歴史に色濃く関連があり、また将来の願望を表すものもあり、伝説、主張などを伝えようとするものもあります。

しかし歴史について一言申し上げると、最近の小中学校の歴史教科書改定で論議されているように、歴史は事実に基づいて書かれねばならないのは当然ですが、数多の歴史上の史実の中から、限られた紙面に何を重大な事象として採り上げるかというところで、その

歴史編集者の歴史観が入ってきて、歴史観の対立論争が絶えないことになる訳です。（日中、日韓対立等）また、所謂「世界史」なるものは、勝者の歴史であり、敗者の歴史は「歴史」の表に出てこないのが通例で、一つの歴史事象を勝者側の歴史と敗者側から書かれた歴史とを併せ読むことによって、その歴史事象の全体像がよりよく掴めると 생각합니다。このことは「フィンランド」のところでお気づきになったと思います。

シンボル・象徴を更に拡大してみると、全世界共通の目的を表現しているシンボルの座にあるのが『赤十字』と『オリンピック五輪』であり、「旗」に目を馳せると、例えばフランス革命の有名な「自由の旗」はフランス国旗になり、ドイツ国旗は一八一七年のワルトブルグ城におけるドイツ統一と革新を求めた学生団体「プルシェンシャフト」の全国大会で振られた「黒・赤・金」の三色旗なのであります。

本論に入る前にちよっとお話した、三高の『桜章旗』が歴史を背負ったシンボルであり、これを振る時の共感が三高の歴史を共有するという共感であることを申し上げたこと、ここにも「シンボルの背後にあるものの重み」を実感として想い起して頂けたらと思います。

長時間、ご静聴ありがとうございました。